



今年の教区目標

われら皆 和解の器
平和の担い手

〒902-0067 那覇市安里3-7-2
カトリック那覇教区本部
TEL.098-863-2020 FAX.098-863-8474
発行人 W.F.バート司教 1部40円
<http://www.naha.catholic.jp/>

(1) 2023年3月1日 (毎月1日発行) カトリック那覇教区報 MINAMI NO KŌMYŌ

第772号 (3月号)

教区誕生を祝う 2月11日「教区の日」 3年ぶりに喜びの集い 盛大に感謝ミサと祝賀会



教区司祭団の共同司式による感謝ミサ



修道誓願 50 周年 シスター上間和子



結婚 50 周年 小山ご夫妻 (左) と石垣ご夫妻



Sr. 山里やよい (左) と Sr. 牧山由美子



幕開け 御前風 コザ教会女性の会



結婚 60 周年 喜屋武敬・カズ子ご夫妻



イエスのカリタス修道女会へ感謝状贈呈

久しぶりに、共に集い祝う人々の笑顔と喜びの声が、安里教会の聖堂に戻ってきた。教区のすべての司祭がウエイン司教と共同司式で感謝のミサを捧げる。ミサの新しい式文に添った新しいミサ曲を、聖歌隊カンタトリカと共に信徒たちも歌う。コロナ禍による規制が緩和されたとはいえ、マスクなどの用心をして、信徒たちは新しい気持ちでこの日を祝った。

この日、シスター上間和子（聖マリアの汚れなき御心のフランシスコ姉妹会）の修道誓願五十周年の金祝、喜屋武敬・カズ子ご夫妻（開南教会）の結婚六十周年のダイヤモンド祝、石垣一彦・たけみご夫妻、小山健・早苗ご夫妻（共に安里教会）の結婚五十周年のダイヤモンド祝、ウエイン司教から特別祝福を受け、記念品が贈られた。また、この三月で沖縄での奉仕を終えられるイエスのカリタス修道女会のシスター牧山由美子とシスター山里やよいに感謝状が贈られた。

2023 年「四旬節」

(2 月 22 日～4 月 6 日)



四旬節

今年も二月二十二日の「灰の水曜日」から四旬節が始まりました。復活祭を迎えるまでの四十日間、教会は祈りと節制に励み、ふさわしい心で復活祭を迎えるよう呼びかけています。

復活祭前の準備期間を四旬節(しじゅんせつ)と呼んでいます。イエスが荒れ野で四十日間断食をしたことに由来しています。

もともとは復活徹夜祭に洗礼を受ける志願者たちの準備期間として起こりました。教会をあげて復活祭をふさわしく迎えるこ

とができるように、祈りと施しと断食に励む習慣が初期の時代から始まっていたのです。

主日は復活の記念日として断食をしない習慣だったので、断食日を実際に四十日になるように、四十六日前の灰の水曜日から四旬節を始めるようになりました。現行の規則では、四旬節は、「聖なる過越の三日間」が始まる主の晩餐の夕べのミサの前で終わります。

灰の水曜日

灰の水曜日に教会では、回心のしるしとして頭か額に灰をか

ける「灰の式」という典礼があります。「灰の式」は、

「土から出て土に帰っていく私たちが、四旬節の努めに励み、罪のゆるしを受けて新しいいのちを得、復活されたおん子の姿にあやかることができるように」願って、昨年枝の主日に祝福していただいた、棕櫚(しゅろ)やオリーブの枝

を燃やした灰を司祭が一人ひとりの額にかける式です。キリスト教が根付いている国では、この灰の水曜日の直前に、「カーニバル(謝肉祭)」というお祭りがあります。古代や中世期の信者たちは四旬節に肉食を断っていたので、その前にごちそうを食べて大いに騒いでいました。その習慣が今日まで続いているのですが、教会とは直接関係ありません。

大斎・小斎

大斎(だいさい)はイエス・キリストの受難に心をはせるために行う食事制限のことで、「一日に一回十分な食事を摂り、あ

との二食は少ない量に抑えること」が基本的な形です。第二バチカン公会議以降は、四旬節中の灰の水曜日と聖金曜日に行うことが求められています。しかし、病人や妊娠中の者、特別な事情がある人は免除され、六十歳未満の健康な信徒が対象となります。

小斎(しょうさい)は肉類を食べないことです。これは、各自の判断で他の償いの形、愛徳のわざ、信心業、節制のわざの実行をもって替えることができます。満十四歳以上の人が守ります。

四旬節教皇メッセージ

毎年四旬節の前に発表される、四旬節教皇メッセージが「四旬節の禁欲と、シノドスの歩み」のタイトルで発表されています。復活祭を迎えるふさわしい準備をこの四旬節を通して行うことができるよう、聖霊の照らしと助けを願いながら歩んでまいりましょう。



2023



2023 Diocese Day Celebration!!!

Program were participated by Priests/Deacons, Sisters and parishioners from the different parishes of the Diocese.



＊四旬節献金は、日本のカトリック教会における指定献金
となっております。所属の小教区またはお近くの小教区に
て献金いただきますようお願いいたします。



四旬節
LENT
Caritas
2023

愛は光
この光は闇の世を照らす
回勅「神は愛」



言葉だけではない愛

クレーバー・ディ・ソーザ神父

与那原教会 主任司祭



イエス・キリストは私たちに愛し、ご自身を私たちのために与えられたことでその愛を示されました。このことから明らかになるのは、愛というのは、単に言葉だけではなく行動すること、すなわち与えることが必要だということです。あなたは誰かに御言葉を与えるかもしれません、励ましを与えるかもしれません、あなたの時間やお金などを与えるかもしれません。し

て、わたしたちは愛を知りました。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです。世の富を持ちながら、兄弟が必要なものに事欠くのを見て同情しない者があれば、どうして神の愛がそのような者の内にとどまるでしょう」

かし愛というのは、助けが必要とされる適切な時に、与える準備をしていることです。ヨハネの手紙一第三章16節から17節は語っています。

ヨハネの手紙一
第三章16節から17節

「イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。そのことによつ

イエスはその命を与えてくださることで、私たちへの愛を示されました。愛とは理論ではなく、行動ではつきりと示されたものであるべきです。ヨハネの手紙一第三章18節が語る通りです。

ヨハネの手紙一
第三章18節

「子たちよ、言葉や口先だけではなく、行いをもって誠実に愛し合おう」

言葉だけでなく、行いをもって誠実に愛し合うのが、私たちの愛です。それは理論ではなく、実行です。私たちの愛は、ヤコブの手紙第二章15節から16節のようであってはなりません。

ヤコブの手紙
第二章15節から16節

「もし、兄弟あるいは姉妹が、着る物もなく、その日の食べ物にも事欠いているとき、あなたがたのだから、彼らに、『安心して行きなさい。温まりなさい。満腹するまで食べなさい』と言っただけで、体に必要なものを何一つ与えないなら、何の役に立

つでしょう」

言葉で愛すること、愛についての「理論」を知るのは簡単です。「神の祝福を」と言うのは悪いことではありません。しかし、必要ならば、望まれる行動が伴わなければなりません。ガラテヤの信徒への手紙第五章13節が語る通り、愛によって互いに仕えるべきです。私たちは互いに無関心であってはならないし、主にあつて仲間である兄弟が支援を必要とする場合、逃げてはなりません。

こんなことを言うと、こう尋ねる人がいるかもしれません。誰かが私たちの助けを本当に必要としているかどうかやっつてわかるのか？その人の必要としていることがよくわからないのに、わたしたちの助けがいるとどうやってわかるのか？と。それは、聖霊を通して知ることができま

す。神は聖霊を私たちに注いでくださり、私たちのすべきことをいつ、どうやってするのか教えてくださいます。フィリピの信徒への手紙第二章13節が語る通りです。

フィリピの信徒への手紙
第二章13節

「あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです」

神は聖霊を私たちの中に注ぎ、聖霊を通して働かれます。したがって、私たちは聖霊の言われることに耳を傾け、それが適切に行われるように、留意しておかなければなりません。愛というのは、頭に浮かんだことを何でもすればいいということではありません。

愛というのは、神の霊が告げる自分のすべきことを、すべき相手に対して愛を持って行えるように、準備しておくことです。神は誰が本当に困窮していて、誰がそうでないかご存知です。神は誰に助けが必要で、誰がそうでないかご存知です。神は私たちの愛を役立てる最良の方法をご存知です。

要約すると、真の愛はただの言葉だけにどまりません。愛は聖霊の導きに従って、行動することまたは行動する準備を整えていることです。

皆様にとって良い四旬節の旅となりますように。

私の人生の目的のキーワードは「喜び」である。今も模索しながら歩んでいる。私は看護職を四十二年経験している。人間関係で悩む事が多々あった。それは、自分の成長のためだと理解している。マザーテレサの「大切なのは、どれだけ沢山の事をしたかではなく、どれだけ心を込めたかだ」の愛の明言は、いつも支えとなった。それは忘れもしない、人生の行け行けゴーゴー五十五歳の時、突然の病で臨死体験、人工呼吸器使用の体験もした。その体験は神秘的体験だった。これについては次回投稿チャンスがあれば述べたい。

職業柄もあり、いつも命と向き合う自分自身だが、自分の大切な家族が他界する喪失感は大い。私の両親のお看取りは病院だった。母は難病で闘病生活

十九年で、母の看護は、反面教師だ。徐々に悪化し、人工呼吸器装着となったが、意識はしっかり最後まで明瞭だった。母は「お迎えが来たよ」と合図をした後、急変し逝った。父は心原性脳梗塞で危機乗り越え三年間闘病した。祖父は拡張型心筋症、七回の心肺停止を経験するも神秘的偶然に何度も助かったが、祖父が発作起こす度、いつも私の直感が当たるので、医師に不思議がられた。祖父は治療の限界で在宅にてお看取りする事が出来た。

子供達にも休みの時は手伝って貰ったが苦しかった。必死に頑張った。今だから肯定できる。何故なら、長女は、助産師、次女は看護師、三女は保育士（修道女）と社会で活動しているからだ。

この世に生まれ、死は背中合わせだ。今になると全ての出来事は、学びとなり、意識を持つ事でそれが活かされる。私は、自分自身の命に感謝し、訪問看護事業を開設した。早くも七年目を迎えた。山あり谷ありだ。癌や化学治療も体験した。だからこそ、今、本当に生きている実感

たて軸よこ軸

『揺り籠から墓場まで』

〜生きると言う事〜

泡瀬教会 曾根ルチア

え、行動できるかだ。でも、命は、傷つき壊れやすい。パスカルは「人間は神と悪魔の間を浮遊する」と言っている。この世は善と悪、表と裏、陽と陰と言った相対性がある。だから、見極め学ぶのである。そこで、信仰に生きるとはどういう事だろう。心の拠り所を何に求めているか（人？お金？神？）。信仰ある者は勿論、神様だと答えるだろう。神様を「知る事」と「理解する」とは意味が全く違う。だから、受け入れ、体験する事こそ大切である。

「霊」を知り信じて生きる事は重要だ。だから、人生を喜劇にするか、悲劇にするかは自分次第だ。コロナ感染によって世界は一変し、医療機関は危機的に瀕した。病院や老人ホームの面会は制限され、感染者は隔離されたり、自粛など、孤独と不安はそれぞれに起きたと思う。ワクチンは一〇〇％の予防ではないが、確かな治療法が確立されていない。

医学の祖、ヒポクラテスは、「汝の薬は食とせよ」。そして、聖ヒルデガルドの「自然療法」アロマや薬草、鉱物等の療法が参考になる。それは免疫力を向上し、自然治癒力を引出し病を予防する。また、触れるケアは心身が癒され生命力を高める事も知った。私は、アロマオイルによるリンパ療法・オルゴン物理療法・温熱療法・心理療法等多技に学んだ。だから、現代医療と自然療法との組合せを活かせるのは在宅療養と考え活かしている。

コロナ禍は病院や施設で、ご家族との

面会も制限があり、在宅での難病慢性疾患やターミナルケアが、徐々に増加した。およそ一三〇例の中で様々な看取りを行なった。特にお看取りは慎重に大切にしている。宗教とは関係なく、臨終の際、折りながら聖地ルルドの聖水を散布し、靈魂を神様に委ね、清め、守護を願い、祈りを込めている。

最近、〇歳児の早産後のケアや産後うつや育児不安、登校拒否児の対応も行っている。年齢の幅は、広く〇歳〜一〇歳、正に「揺り籠から墓場まで」である。核家族で若者が結婚して子育て、保育園の受け入れは中途入園は厳しく、生活や経済的問題にも影響は大きい。少子化対策を耳にしているが、現実的な対策の遅れに疑問は大きい。少子化なのに希望通りの保育園を選べないとは理解し難い。

命は愛によって生かされ愛によって守られる。そして、人のご縁で学びも得る。私の今後の希望は、寝たきりを防ぎ、多機能を活かせる「癒しのシェア施設」を計画実行する予定だ。



2023年2月拡大司祭・助祭会議議事録

開催日時：2023年2月7日(火) 10:30～12:00

会議の前にマイケル神父の司式で聖体賛美式が捧げられた。

1. 報告及び連絡事項：司会はリカルド神父が担当。

- ・津波古事務局長の父上の帰天がウェイン司教から報告され、一同でお祈りをお捧げした。
- ・続けてウェイン司教からカプチン会のペトロ神父の沖縄転居が報告された。合わせて、ペトロ神父を存じていない若い司祭たちに、ペトロ神父の経歴が紹介された。今後は小禄修道院に住まれ、活動されることが報告された。
- ・前回(1月会議)の報告を新田が行い、承認された。
- ・2/8日(水)に行われる福岡の大神学校での会議に、ウェイン司教と養成担当のマイケル神父が出席されることが報告された。
- ・2/13日から17日までの日程で、東京都潮見の中央協議会で行われる司教会議にウェイン司教も出席されることが報告された。典礼の勉強会の他、ハンセン病に対するカトリック教会の反省点についても協議が行われる。
- ・3月3～4日に正平協の全国会議がズーム会議で開かれ、セクシュアリティが大きなテーマとして扱われることになるであろうとの報告が、ウェイン司教からあった。
- ・具志川教会のサニー神父から、1/29日に開かれたサントニーニョ祭の報告と協力への感謝が述べられた。
- ・1/15日に安里教会で開かれた女性の会の新年の集いの報告が、担当のフランシス神父から行われた。70名余りの参加があり、2/11日に行われる教区の日への協力についても話し合われた。
- ・カプチン会の年次黙想会と、総長、管区長の訪問について、地区長のマキシム神父から報告が行われた。カプチン会員たちが働く福岡教区やさいたま教区にも訪問し、会員たちと個別に面談も行われ、充実した黙想会や訪問であったとの報告があった。
- ・開南教会の古川神父より、1/18日(水)に、開南教会で開かれた教誨師の全国大会について報告が行われた。全国からカトリックやプロテスタント、聖公会の教誨師をされている神父や牧師70名余が集い、交流を深めたとのことであった。
- ・典礼担当のブイ神父から、聖週間の典礼に関して、新しいミサ式次第の合わせた暫定版の儀式書が出るので、確認に上、導入検討するよう要請が行われた。灰の水曜日の灰の式については、コロナ禍で行うよう要請したやり方を継続するよう注意が行われた。
- ・洗礼式についてウェイン司教より注意喚起が行われた。緊急(臨終)の場合を除き、成人の洗礼は、入門式、洗礼志願式を経て、復活徹夜祭で洗礼が授けられるべきである。四旬節を通して行われる洗礼志願者の洗礼への準備を正しく行うよう注意があった。
- ・カリタス担当のマーシーさんから、四旬節のカリタスキャンペーンの小冊子が届いているので、信徒たちへ配布するよう要請があった。
- ・岡山聖虚さんという信徒の画家の、パチカンに寄贈された絵の公開を求める案内文も入れているので、小教区に置いてお知らせいただきたいとの要請があった。

2. 審議事項

- ・ウェイン司教からコロナ禍の教会活動について、具体的な取り決めは主任司祭と小教区にお任せするが、宿泊を伴う活動は慎んで欲しいとの要請があった。与那原の「祈りの家」と恩納村の「黙想の家」は宿泊できないので、そのことも正しく信徒たちに伝えるよう要請があった。
- ・2/11の教区の日について、担当のフランシス神父から報告が行われた。午後2時から感謝ミサ、3時半から5時まで祝賀会を行う方向で準備していることが報告された。お祝いの申込みは1/22に締め切れることも合わせて報告された。司教からは今年度で沖縄から撤退する石川のイエスのカリタス修道女会に感謝状を贈呈することも報告された。
- ・3教区合同黙想会について、担当のブイ神父から報告が行われた。6/19(月)～6/23(金)の日程で、仙台教区長のエドガル・ガクタン司教を講師にお迎えし、宿泊先のホテルの申し込み等も添えて、案内を送ることが報告された。南部の教会の神父たちは通いでも良いが、中北部と離島の神父たちは宿泊を申し込むようアドバイスがあった。
- ・6・23沖縄慰霊の日の巡礼について、黙想会に参加する司教、司祭たちにも、巡礼への参加を進めたい意向であることが報告された。魂魄の塔での祈りの集いは教区平和委員会が担当するが、巡礼の持ち方については、新しい方策も含め検討されるよう担当司祭たちに要請があった。
- ・司教訪問、司教の予定について、マーシーさんから報告があった。2/7日、司祭会議。2/12日、安里教会公式訪問、午後与那原シスターズ講話。3/3、4日正平協会議。3/7日、司祭助祭拡大会議。3/19日、石川教会訪問。

(←7ページ下へ続く)



ロザリオとボランティアと

首里教会 ニッタ・タダイ

何がきっかけか？と問われたなら、はつきりと答えることができる。押川名誉司教が「自分は一日四環唱えている」と仰ったからだ。これだけ忙しい職務にある人が一日四環？どうやって？衝撃だった。

それまでは曜日ごとの一環と、二〇〇二年に加えられた「光の神秘」を覚えようという目的で、一日二環祈るように努めてきた。それだけでも時間のやりくりは大変なのに、四環は無理だろうと思っていた。できるとすれば観想修道会の修道者たち（失礼！）だけだろうと・・・。

あのお忙しい司教様がやっておられるのであれば、どうにかできるのではないかと自問自答する日々。二〇一五年の八月から挑戦しようと始めてみた。ロザリオは曜日ごとに、喜び、苦しみ、栄え、光の四つの神秘が割り当てられていて、一日一環唱えるのが普通だ。

四環の黙想のうち、光の神秘は二〇〇二年に聖教皇ヨハネ・パウロ二世によって制定された。新しいので、最後に唱えることにしていたが、意味合いを考え

ると、喜び、光、苦しみ、栄の順がキリストの生涯を追いかけているので黙想しやすい。

最初の頃は、夏場でもあり、夜散歩しながら繰るのを日課にしていたが、早寝早起きが定着してきてからは、早朝散歩と早朝ミサへの行き帰りで、午前中で三環までは済ませられるようになってきた。

かつて神学校や修道会にいた時は、こうした祈りも義務と思っでやっていたが、辞めてからはあまり祈らなくなっていた。丁度起こった、東日本大震災のこともあって、一日二環を自分に義務付けてきた。大震災だけでなく、世界各地で起こった自然災害、テロや紛争、戦争、原発災害に加え、難民問題の祈らざるをえない出来事が次々に起こってきた。

何度も虚しさを覚え、口先だけの祈りに疑問を感じたり、意味があるのかを問うてみた。見えない世界からは何の答えももたらされることはない。虚しかろうが疑問を感じようが、口先だけであろうが、とにかく祈り続ける、唱え続けることで、一つだけ分かっていることがある。自分が主体となつて祈っていた、祈ってきたと思っていたことが、実は彼岸からの働きかけでもあるかのように、誘われていた、そうするように仕向けられていたという感覚が湧き上がってきた。そうなる、もうロザリオの祈りは生活の一部に

なってきた。

だからと言って、決して聖人君子になったわけではない。愚痴も言えば不平不満に舌打ちすることもしばしば。何度も自己嫌悪に陥りつつ、それでも日課となつてしまふと自然に手はロザリオを弄っている。それと、付け加えておきたい。祈りには確かに力がある。祈り、祈られる関わりを大切にしたいと私は思う。

二〇一六年熊本震災のボランティアセンターに那覇教区から専従として出かけたが、コザ教会で行われたロザリオを祈る集いの中で、マリア様と呼びかけられたように感じてのことだった。言葉でうまく言い表せないが、「行きなさい」と言われている気がした。祈りの会の後、すぐに教区事務所に電話して、「熊本でボランティアセンターのスタッフを必要としているなら、那覇教区から一人出せまずと返事して良い」と事務局長に伝えた。

自営業なので、出かけている間のしわ寄せは家族が担うことになるのは承知の上、それでも何とかなるのだらうと感じていた。そうでなければ応えられない。熊本ではボランティアに駆けつけていた旧知のシスター達が、何を必要とし、何に困っているのかを聞き取りして、カリタスと社協の橋渡しに奔走した。社協も最初は警戒して団体登録をさせてくれなかったが、毎日

十名余のボランティアを連れて通う団体を見て登録が許可され、その翌日からボランティアさんたちには「カリタス」のビブスを着て行くよう要請した。

また、私個人は大型免許を持っており、ダンプの運転経験もあるので、集められた土砂を捨場に運搬する作業の役にも立てた。自分が持っているものを役立てるようにと呼ばれたようにも感じた。熊本での日々でも一日四環のロザリオは続けることができた。車の運転中でもロザリオは繰れる。また、やがて還暦を迎えようとする年の功も手伝って、全国からやってくるボランティアさんたちと親しく話し、交流することができた。現役を退いて、ボランティアに汗を流してくださる先輩たちが、カトリックの中高や大学からボランティアにやってくる若者たちに、大ハンマーの振り方や経験を分かち合うのを見て、カリタスの活動の繋がりが広がりが大きな輪になってくれるだろうと期待が持てた。

幸い、熊本のボランティアセンターは九月で閉所が決まり、私も四ヶ月の奉仕で帰れる事になった。その後は個々人で関係を繋いだ方々と関わることになり、熊本から沖縄に訪ねて来てくれた方も複数おられた。今でも農産物の購入をしたり、ゆるやかな繋がりを保っている。

- ・3月3日午前10時から、普天間教会において女性クリスチャン世界祈祷日の集いが行われることが報告された。
- ・事務局から、休暇予定の報告は早めに提出するよう要請があった。
- ・事務局から3月の会計報告は4月10日までに、3月31日時点の通帳の写しを添えて提出すること、また他の月についても期限を守って提出されるよう要請があった。
- ・昼食後の午後1時より、司祭たちは「教区の日」に向けて、歌の練習をすることが呼びかけられた。
- ・次回司祭助祭拡大会議は3/7日、(火)に行われることが報告された。

日本のカトリック信者の皆様

2023年「性虐待被害者のための祈りと償いの日」にあたって

いのちに対する暴力が荒れ狂う世界にあって、神がいのちを、わたしたちに賜物として与えてくださったと信じるキリスト者には、いのちを守り、人間の尊厳を守る務めがあります。教会にとって「イエスをのべ伝えるとは、いのちをのべ伝えることにほか」ならないからです（ヨハネ・パウロ 2 世「いのちの福音」80）。

その教会にあって、率先していのちを守り、人間の尊厳を守るはずの聖職者や霊的な指導者が、いのちに対する暴力を働き、人間の尊厳をないがしろにする行為を働いた事例が、近年相次いで報告されています。性虐待という人間の尊厳を辱め蹂躪する聖職者や霊的指導者の行為によって深く傷つけられた方々が、長い時間の苦しみと葛藤を経て、ようやくその心の思いを吐露された結果であると思います。そのように長期にわたる深い苦しみを生み出した聖職者や霊的指導者の行為を、心から謝罪いたします。

なかでも保護を必要とする未成年者に対する性虐待という、きわめて卑劣な行為を行った聖職者の存在や、司教をはじめとした教会の責任者が、聖職者の加害行為を隠蔽した事例が、過去にさかのぼって世界各地で報告されています。教皇フランシスコは、この問題に教会全体が真摯に取り組み、その罪を認め、ゆるしを請い、また被害にあった方々の尊厳の回復のために尽くすよう求め、「性虐待被害者のための祈りと償いの日」を設けるようにと指示されました。日本の教会では、四旬節・第二金曜日を、この祈りと償いの日と決めました。2023 年にあっては、来る 3 月 10 日（金）がこの日にあたります。

日本の司教団は、2002 年以来、ガイドラインの制定や、「子どもと女性の権利擁護のためのデスク」の設置など、対応にあたってきました。2021 年 2 月の司教総会で、「未成年者と弱い立場におかれている成人の保護のためのガイドライン」を決議し、教会に求められているいのちを守るための行動に積極的に取り組む体制を整えてきました。昨年には、「子どもと女性の権利擁護のためのデスク」が啓発活動にさらに取り組むよう、司教協議会会長直属の部門としてガイドライン運用促進部門を別途設置し、責任をもって対応する態勢を整えつつあります。もちろんいのちを守り、人間の尊厳を守るための務めに終わりはありません。聖職者をはじめ教会全体の意識改革などすべきことは多々あり、教会の取り組みもまだ十分ではありません。ふさわしい制度とするため、見直しと整備の努力を続けてまいります。

あらためて、無関心や隠蔽も含め、教会の罪を心から謝罪いたします。神のいつくしみの手による癒やしによって被害を受けられた方々が包まれますように、心から祈ります。同時に、わたしたち聖職者がふさわしく務めを果たすことができるように、お祈りくださいますようお願いいたします。どうぞ、四旬節第二金曜日に、またはその近くの主日に、教皇様の意向に合わせ、司教団とともに、祈りをささげてくださいますようお願いいたします。

2023年2月17日 日本カトリック司教協議会 会長 菊地 功



NPO 法人ぶどう園の会

訪問看護ステーションクララ

TEL&FAX:098-937-5001

住所 沖縄市泡瀬2丁目37-15

- ・基本受付 月曜日～金曜日（申込、相談など）
- ・営業時間 8:30～17:30
- ・営業日 24時間365日（緊急対応含む）



◆安里教会
ミカエル 津波古 光生 様
二〇二三年一月十三日帰天
享年二十一歳

パウロ 宇根 功 様
二〇二三年一月二十三日帰天
享年九十四歳

訃報



葬祭の
「やすらい企画」

私たちは故人とご遺族の意向を最優先に考えます。何でもご相談下さい。

那覇市首里鳥堀町4-57-3
TEL&FAX:098-885-8205
<http://w1.nirai.ne.jp/yasurai>
E-mail:yasurai@nirai.ne.jp

24時間
受付

～ご遺族の心をもって奉仕する～
そうてんしゃ

葬 典 社

- *創業30数余年・・・。
- *皆様に支えられ「感謝」とともに人生を閉じるためのお手伝いをさせていただいております。
- *ご質問、ご相談、24時間、いつでもお電話下さい。

「ゆうな会」会員募集中です。

ひ が たかしげ
(実務担当) 比嘉 高茂

24時間
受付

てんごく
☎098-853-1059

